

つがるの昔っこ (昔話) 17

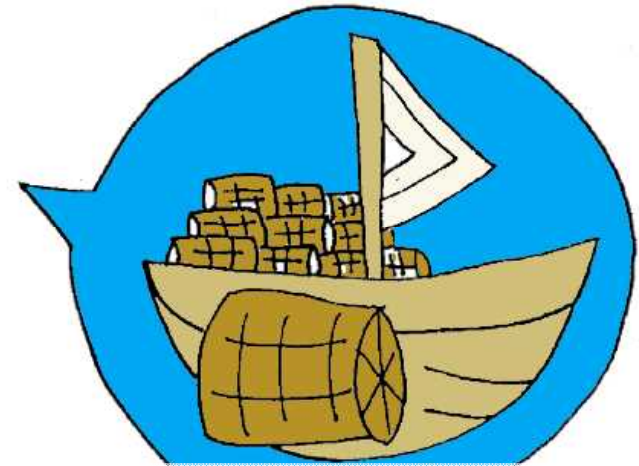
宝の徳利 (標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

昔、お父さんとお母さんと息子が居りました。お母さんが死んで、お父さんは継母（ままはは）をもらいました。継母にも息子より年下の男の子が一人居ました。兄（息子）は嫁も居て、子供も居りました。弟（連れ子）も嫁を貰って、子供が出来ました。





ある日、爺さん（お父さん）が、『お前たちに一人三十両ずつあげるから、そのお金で三年間、好きなものを習って修行してこい』と言いました。弟は『俺は商人（あきんど）になる』と言いました。

兄は『俺は大工になる』と言って、ずっと遠くのお城のある町に行って弟子入りしました。



兄は一生懸命に修行したおかげで大工の腕がめきめきと上がりました。死にものぐるいで頑張って修行して、あっという間に三年が経ちました。兄は親方からひまを貰って、家に帰る旅にでました。

道具を背負ってずーっと行ったら、道路端に徳利を立てて、酒を飲んでいる爺様が居ました。その爺様が『こら、兄さん、兄さん、お前はどこに行くんだい。まあ、ここに座って一緒に一杯やっていけよ』と言って、兄を座らして二人で酒盛りをしました。



『そろそろ、行きます』って、兄が立ち上がった時に、『それじゃあ、私も一緒に行くかな』って爺様も徳利を持って立ちました。

二人でずーっと行ったら、町の中の川のわきに人がいっぱいいたかっておりました。『なんだろう』と思って見たら、橋が流されて困ってしまった町の人達が集まって相談しているところでした。



兄は、『これは、困るよなあ』と思って、その町に泊まって、橋を架けてあげました。兄と町の人が、せっせと働いているそばで、爺様はにこにここと笑いながら徳利で酒を飲んでいました。橋も直って、二人はまたずーっと行きました。ある村に来たら、壊れて雨漏りしているお宮がありました。



兄は『これだと神様も、村の人達も困るだろうな』と思い、そこに泊まって、このお宮も直してやりました。爺様はそのわきで、酒を飲んでいました。

又、ずーっと行ったら、今度は火事で焼けてしまったお宮がありました。兄はここでも何日もかかってお寺を建て直しました。爺様はここでも酒ばかり飲んでいました。

兄は貰ったお金を全部使ってしまい、
着物はヨサヨサとなり、顔は髭だらけ
になり、髪は藁で結っていました。



二人はまた、テクテク歩きながらずーつと行きました。大分行って、兄と村近くになった時に
爺様が言いました。

『兄さん、兄さん、私はお前と二人でこうして旅してきたけど、そろそろここで別れよう。私は
ここから曲がって行くので、お前は真っ直ぐに村へ帰れ。仕事がんばって、倅せに暮らせ』

兄は『爺様、爺様、何もここで急に行かなくても、ちょっとだけ私の家に寄って泊まってください』と言ったら、『それは有り難いけど、やっぱり私はここでお前と別れるよ。この徳利をお前にやるよ。この徳利はよ、酒を飲みたい時に酒が出るし、これを振り回せば、お前の欲しい物、何でもでてくるからね』って言って、兄に徳利を渡して、曲がって行きました。



『爺様ー、気を付けて行ってー。こっちに来たら必ず俺の家に寄ってくれー。』と兄が叫んだら、爺様は振り向いて、ニッコリ笑ったあと、スーッと消えてしまいました。

徳利を風呂敷に入れて家に戻ってきたら、丁度、弟も家に戻ってきていました。弟は商人になって、立派な羽織と着物を着て、お父さん、お母さんに土産をいっぱいくれていました。そこに、藁で髪を結って、ヨロヨロな着物を着て、ボロ風呂敷を下げた兄が帰ってきました。さっき、弟が三十両を元手に立派な商人になって土産いっぱい持って帰ってきたと思ったら、今度は兄が乞食のようにして戻ってきました。



継婆と弟と弟嫁は始めは驚きましたが、兄のその身なりを見て、目配せし合いながら、馬鹿にしたようにニタラニタラと笑いました。爺様（父親）は、こうして兄も無事に帰ってきたのを見て、嬉しくってたまらなかったですが継婆達の手前、仕方なく怒りました。



『何なんだ、お前のその身なりは、三十両も元手にして、お前に残ったのは、そのボロ風呂敷だけか、お前みたいな奴はこの家に入れるわけにはいかない。どこへでも行ってくれ』兄嫁と子供は『オアイ、オアイ』と泣いて、家から追って出された兄について行きました。兄と嫁と子供は母屋から離れた薪小屋に入って行きました。



兄は、泣いている嬢（かかあ）と子供をそこに座らせて、風呂敷を開いて、爺様から貰った徳利を出してブンブン振り回しながら言いました。『ここに、畳を敷いてくれ』と言ったら、新しい畳がバタバタと敷かれました。『ここに、屏風をまわしてくれ』と言ったら、屏風がジョロツとまわされ、また、『ここに、子供の着物と嬢の着物と、魚の三品出てくれ』と言ったら、良い着物と魚が出てきました。『菓子出てこい』と言ったら、菓子がいっぱい出てきました。嬢と子供は目を丸くして、顔中でよろこんで、よろこんで、着物を着て、旨いものを食べました。



それでも、嬢は賢くて、母屋に行って『爺様、爺様、うちの旦那が酒も肴もいっぱい仕度したので、来て一緒に飲んでください』と言いました。爺様は行きたくて行きたくてありましたが、婆様が怒るので、顔は出しませんでした。

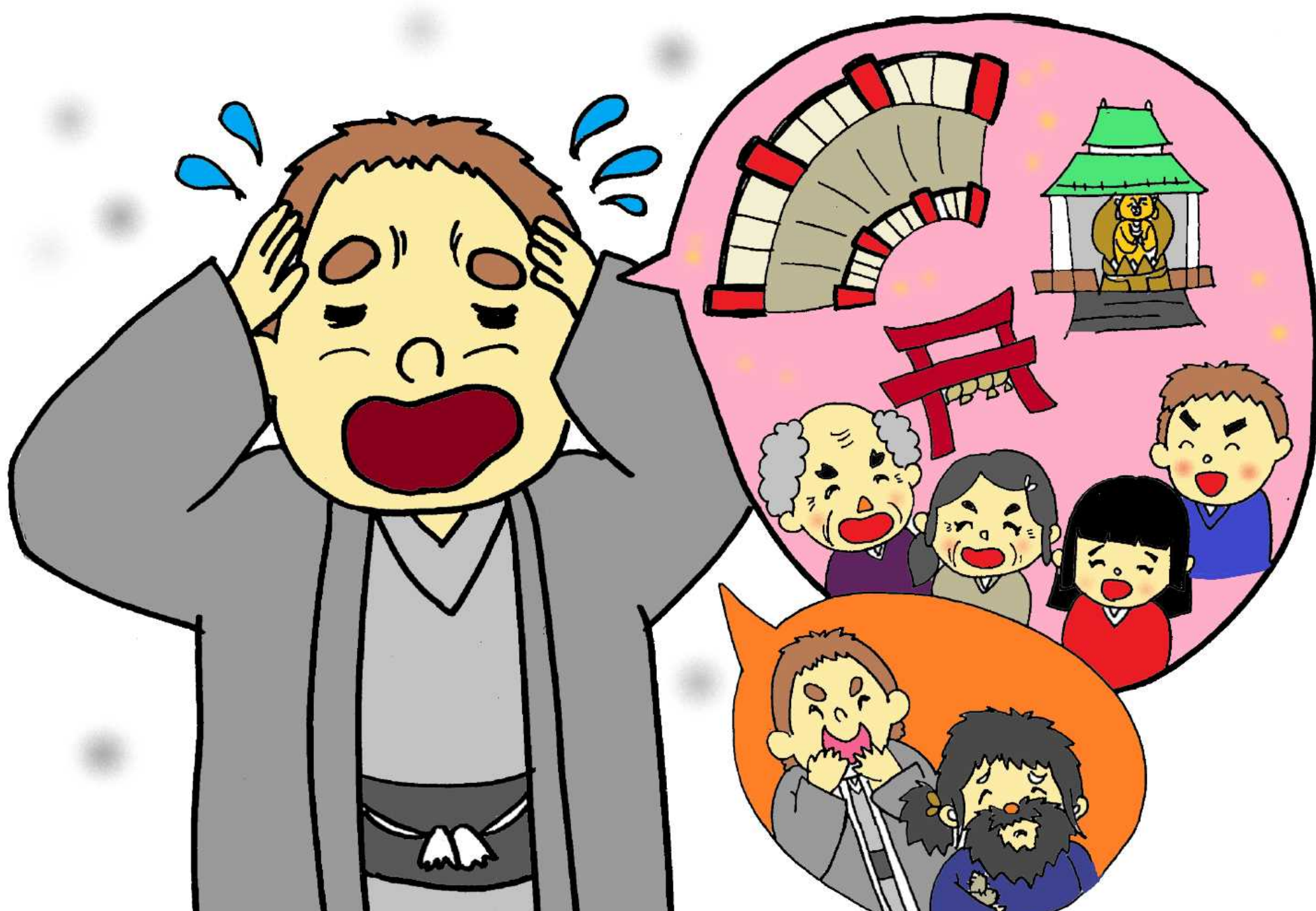
兄は、朝、小早く起きて、『ここに家建て』と言ったら、立派な家が建ちました。『ここに米蔵建て、金蔵建て』と言ったら、蔵が次々に建ちました。





雨が降っても、日照りでも、兄嫁は、弟嫁に毎日声をかけるし、弟の子供達が行けば、お菓子でも何でも食べて来ました。弟嫁は『兄嫁を笑ったけど、今じゃあ、兄嫁に笑われるようだ』と言い、爺様は爺様で、『やっぱり兄は兄のだけある』と、モホモホとなっていました。

橋や寺などを直してもらった町の人や村の人がみんな来て、『親方、親方』って、家や蔵を建てるのを頼んでいきました。



弟もそれを聞いて、『あーあ、俺は商いで儲けたお金を全部自分で使ったけれど、兄はあの三十両を橋を架けたり、寺を直したりして、全部、人のために使ったんだなあ。俺はあの時に兄のボロ着物を見て笑ったりして、わー、恥ずかしい、恥ずかしい』と言い、

それから、兄を助けて二人で一生懸命に稼いで、孫子の代までも倅せに暮らしました。兄弟というのは仲良く暮らすものですよ。



おしまい